

中南アメリカの地誌授業の一環として「パラグアイと日系移民」！

小野間 豊和
神奈川県立湘南高等学校

- ◆実践教科：地理歴史（地理A）
- ◆時間数：7時間
- ◆対象学年：高等学校1年生
- ◆対象人数：40人

◆実践の目的◆

勤務校の地理授業（第1学年）では、先進諸国をはじめとして様々な開発途上国も題材として取り扱う必要があり、生徒自らが興味・関心をもって各国や地域を多面的に把握していく姿勢が求められると考えてきた。海外研修に行って得てきた情報は、あくまでもその国の一面を切り取ったにすぎないものであり、それだけで一般化することは大変無理や危険があるといえるが、しかし現実の一面であることも確かだといえる。パラグアイについてもそのような一面であったにしても、生徒らが限られた情報の内容をよく比較・検討し、それぞれに地域理解をより深めることができると考えた。また、パラグアイを初めとして中南アメリカには多くの日本人移住者がおり、日系社会を形成してきている。パラグアイ社会と日本人移民との関係を取り上げ、今日のパラグアイ国家建設に大きく貢献してきたことを伝え、現地パラグアイ国民と日本人移民の共存共栄の願いや、国際協力事業団などによる日本の支援の実態を伝えるとともに、生徒自身が国際協力について考え、国際理解のもとに行動できる力を育てて生きたいと考えた。

◆授業の構成◆

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 ・中南アメリカを知る ・中南アメリカとラテンアメリカを考える	(1) 地図で中南アメリカの位置を確認し、その範囲を理解する。 (2) 多様な地形や気候の大まかな特徴を理解する。独特の植生の形成にもふれる。	(1) 地図帳 (2) 教材プリント 写真、新聞、雑誌、通貨等
2限目 ・人種・民族的な多様性を知る ・中南アメリカの農業の特色を知る	(1) 大航海時代からのポルトガル・スペインによる支配、植民地体制下での人々の生活を理解する。 (2) 大土地所有制度の残る農牧業の展開 ファゼンダやエスタンシアについて理解を深める。	(1) 地図帳 (2) 教材プリント
3限目 ・1・2限目を発展させ、中南アメリカの一つとしてパラグアイの農業や生活を知る	(1) 世界で唯一つの裏表のある国旗について説明をし、興味を持たせる。 (2) 国民の多くがメスチソであることや民族的差別があまりない現状を理解する。	(1) PC、スライド（動画も含む） (2) ワークシート (3) マテ茶

<p>・パラグアイと日本との関係を知る (プレゼンテーション)</p>	<p>(3) 日系移民の方々の開拓や日本の協力事業の実際を紹介し、理解を深める。 (4) 現地の生活を知る手立てとして世界4大飲料の一つといわれるマテ茶を試飲する。</p>	
<p>4 限目 ・中南アメリカの資源と工業化</p>	<p>(1) 豊かな資源の存在を理解する。 (2) 工業化が一次製品の輸出に依存して行われてきたことを理解する。 (3) 多額の累積債務を抱えてきたことをアジアNIESと比較して理解する。</p>	<p>(1) 地図帳 (2) 教材プリント</p>
<p>5 限目 ・中南アメリカの社会問題を知る ・カリブ海地域－社会主義国キューバーを知る</p>	<p>(1) 所得格差の問題や都市問題について理解する。 (2) 社会主義国キューバに焦点をあて、独立とアメリカ合衆国との関係を理解する。 (3) カリブ海地域特有の文化として音楽を視聴する。</p>	<p>(1) 地図帳 (2) 教材プリント (3) PC・音楽ファイル・CD</p>
<p>6 限目 ・アマゾンの人々と生活</p>	<p>(1) 自然環境とそれに依拠した住民の生活を理解する。 (2) アマゾンの開発の現状を理解する。開発にともなう問題について考察する。</p>	<p>(1) 地図帳 (2) 教材プリント (3) 教材写真</p>
<p>7 限目 ・アンデスの人々と生活</p>	<p>(1) 自然環境と独自の文化や文明の発達について理解する。今日世界各地で生産されている農作物の中で新大陸起源のものが如何に多いか理解する。 (2) アンデス高地に生活する人々の特徴を理解する。</p>	<p>(1) 地図帳 (2) 教材プリント (3) 教材写真</p>

生徒の反応

1. 国際協力や援助、日本人海外移住について感じたこと

- ・様々な分野で協力隊員が活躍している様子がわかった。
- ・機会があれば率先して参加したい。
- ・国際援助も必要だが、自国の財政赤字問題を解決することが必要である。
- ・日本はお金だけ出しているといわれる現状を新聞で読んだが、実際に現地に行つてためになる援助活動しているところを見て、日本の援助はお金だけではないんだと分かり嬉しかった。
- ・家族で南米に行こうというポスターが印象に残っている。
- ・過酷な労働をしなければならないのに、新たな土地で、大きな夢を持って一生懸命頑張っている。
- ・なぜ移住しなければならなかったのか、詳しく知りたくなった(疑問に思った)。

2. 授業の感想

- ・中南アメリカについて全然知らなかったと実感できた。
- ・自分はパラグアイのことをあまり知らないが、パラグアイの人たちは身近に日本を感じていることに驚いた。それだけ日本というのは他国からみたら豊かでいい国に見えるんだと思った。
- ・中南米についてほとんど知識がなかったので、今回のスライド学習を通して、初めて知ることが多くて面白かった。
- ・パラグアイ以外の中南アメリカの国々についてもっと知りたいなと思った。
- ・人生のうちに一度は中南アメリカに行って、生活・文化などを体験したいと思った。
- ・祈祷師をお願いして病気を治してもらうことには、本当にびっくりした。
- ・日本以外の国に行って異なる文化に触れたり、現地の人と交流したいと思った。
- ・スライドを使った授業は、言葉や文字と映像をつなげてみられて頭に焼き付けやすかった。
- ・スライドを使った授業は、新鮮で楽しかった。こういう授業は記憶に残るし、地理が好きになる。
- ・とてもよい授業でした。いつもと違う授業でとても面白かった。
- ・マテ茶は美味しかった（複数）。マテ茶は自分には合わなかった（複数）。
- ・日本とパラグアイの関わりが思ったより長くて驚いた。キャッサバを食べてみたいと思った（複数）。
- ・パラグアイのことを学んだつもりが、気がつくとも日本と比較して、結局は日本について考えさせられていました。世界を見渡すことで、自国について新たに考えられるんだと思いました。

◆授業実践の所感・反省点◆

・学習指導要領の目標として、地理 A では「現代世界の地理的な諸課題を地域性を踏まえて考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」とある。また、地理 B では「現代世界の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し、・・・」とあり、国際化の進展等社会の変化に伴って現代世界が抱えている課題を地理的に考察することに重点が置かれているとともに、現代世界に生起している地理的諸事象を位置や区間的広がりとの関わりでとらえるとしている。現代世界のほとんどの事象が地理的事象になりうると考えると、今回の研修は、まさに現代世界に生起している地理的な諸課題を、地域性を踏まえて考察することを可能にしてくれた素晴らしい機会であったと考える。

体験的、作業的な学習を取り入れたり、今日的課題を日常生活と関連付けて取り扱ったりすることを日頃から配慮してきたつもりであるが、今回の実践授業では、体験的なことごとを取り入れ、生徒にとってもインパクトのあるものであったと考えている。実際、中南アメリカ（ラテンアメリカ）については、もっと身近に感じている生徒が多いのではと予想していたが、コーヒーやサッカー、カーニバルなどを除くと思いのほか少なく、パラグアイの場所さえ知らないという生徒が多かった。やはり日本の裏側まきに対蹠点に位置するところなので絶対的情報量が不足しているのを感じざるを得なかった。しかし、現実にはブラジルをはじめとして日本への労働力移動が生じていて、各産業分野で活躍している人が多いにもかかわらず、身近に接し、考えることが少ないことなどが理由と考えられる。この授業を通して、中南アメリカに興味・関心を抱いてくれた生徒も多く、今後の彼らの取り組みに期待がもてると感じている。また、日本人移住については、田岡大使を始めとしてイグアス移住地の皆さんなどから直接お話を伺えたことは願ってもないことだった。慣れない見ず知らずの土地で艱難辛苦が多々あったと思われるが、現地でご苦労された方々の熱意・執念には頭が下がる思いである。生徒たちにその思いをしっかりと伝えられたかという不安があるが、今後も不明点を考察しながら日本人移住についても明確な情報を提供していきたいと考えている。

現地の学校の生徒たちが明るく意欲的に学習していることには、パラグアイの将来に期待がもてると感じたが、日本が今後どのような立場で国際貢献していくか、次代を担う生徒たちが国際理解を踏

また地理的事象の把握を行い、各地が抱える課題について気づき、ステレオタイプでない広い視点からの考察ができるような工夫をしていきたいと考える。

◆今後の改善点◆

今回のような授業をどの地域についても展開できれば良いのだが、個人で世界各地を回って資料収集をするのは大変である。JICA にはフォトランゲージについては用意があると聞いているが、世界各地の直近の資料や映像（動画も含めて）などの準備・貸し出しをしていただくと大いに心強い。

また、現地でさまざまな方々と交流ができたことには感謝しているが、日本人関係者が多かったので、現地のごく普通の生活をしている人々との交流の時間がゆっくりとれば良かったと考える。現地の学校の先生方や小農家と話す機会はあったが時間不足であった。現地の人々の視点にたった生のさまざまな話を伺うことで、もっと授業展開上の深みや真実みが出せるものとする。

◆参考資料◆

プレゼンテーション資料 (ppt) 抜粋



パラグアイと日系移民



パラグアイ概要(1)

- 位置 南緯19° 18' ~27° 3' 西経54° 15' ~62° 38'
- 面積 40.7万km²
- 人口 615.8万人(2005)
- 人口密度 15人/km²(2005)
- 首都 アスンシオン(人口約51万人)
- 言語 スペイン語 グアラニー語
- 民族 メスチソ(96.5%)・白人・インディヘナ
- 宗教 カトリック

パラグアイは、南米大陸のほぼ真ん中に位置しているため、スペイン語では「Corazon de America del Sur」、日本語に直訳すると「南米の心臓」と呼ばれている。

パラグアイの人口は615万人で、東京都(1227万人 2006)の人口のほぼ半分。また、都市化はアルゼンチンやウルグアイより遅れており、総人口に占める都市人口の割合は57%で中産階級はあまり育っていない。首都のアスンシオンで約51万人ほどですから相模原(68.6万人)より少ない。アスンシオンは5年連続世界一生活費(物価)が安い都市となっている。

人種構成においては隣国アルゼンチン、ウルグアイとは異なっている。アルゼンチン、ウルグアイ両国では白人の割合が9割以上であるのに対して、パラグアイの場合は先住民と白人との混血 97%で、白人はわずか2%を占めるに過ぎない。混血はグアラニー族とスペイン人との混血を意味するグアラニー・エスパニョールと呼ばれる。混血が多いことはこの国の言語にも反映し、学校教育においてもグアラニー語が必修とされており、スペイン語とグアラニー語が公用語として広く用いられている。

パラグアイ国旗

- 世界で唯一、表と裏で図柄の一部が異なる珍しい国旗

現在の国旗は、4番目の国旗です。三色の赤は独立戦争で流された兵士の血と正義を表し、白は平和、青は自由と秩序を意味していません。

中央の紋章は、旗の表が中央に独立記念日の「5月の星」、ヤシ(棕櫚)やオリーブの葉がリース型を作り、そして国名などが描かれた国章で、同じ位置の裏には自由の帽子とライオン、「平和と正義」と書かれたリボン配置した国庫の証印です。

オリーブとヤシ、それぞれが分離し、独自の二つの精神を意味するのではなく、それらひとつひとつが、唯一の独立した象徴として表現されている。その一方で、オリーブとヤシは、我々パラグアイ民衆の闘争という歴史上での偉業、価値を意味し、我々の成し遂げた栄光に対する大喝采の冠を形作っている。

パラグアイ国旗の紋章

・表



- ・両紋章の外形が円で、国旗の表側は中央に独立記念日の“5月の星”、オリーブとヤシから構成される。
- ・国旗の裏側は自由の帽子とライオン

・裏



中央の紋章は、旗の表が中央に独立記念日の“5月の星”、ヤシ（棕櫚）やオリーブの葉がリース型を作り、そして国名などが描かれた国章で、同じ位置の裏には自由の帽子とライオン、「平和と正義」と書かれたリボンを配置した国庫の証印です。

オリーブとヤシ、それぞれが分離し、独自の二つの精神を意味するのではなく、それらひとつひとつが、唯一の独立した象徴として表現されている。その一方で、オリーブとヤシは、我々パラグアイ民衆の闘争という歴史上での偉業、価値を意味し、我々の成し遂げた栄光に対する大喝采の冠を形作っている。

日系移民

- ・初めての移民か？
ジョン万次郎
＜海外移住の始まり＞
- ・ハワイ（1868年）最初の集団移民（グアムも）
砂糖プランテーションの労働力
- ・ハワイがアメリカ合衆国の一部となり北米へ
(1924年米国移民法で全面禁止)
- ・ブラジル
1888年奴隷制廃止によるコーヒー農園での労働力不足
ヨーロッパからの移民（コロノ）誘致
- ・皇国殖産会社 日本人移民受け入れを売り込み

パラグアイ移民

- ・1936年 ラ・コルメナ 11家族81名移住
- ・第二次世界大戦で国交断絶
強制収容はなかったが、コルメナに収容
- ・1954年 チャベス
アマンバイ
- ・1956年 ラバス
- ・1960年 ビラポ
- ・1961年 イグアス
- ・1970年代後半まで移住継続

日本からパラグアイの移住は、1936年に始まってから、今年でもって71年となります。

ブラジルでは、出稼ぎにきた日本人移民と、奴隷の代替を求める雇用主との間では目的の違いから紛争が絶えず、過大な重圧を受けた移民の脱走が相次ぎました。

ブラジルでは、排日に機運が高まり、これを察した日本の外務省・拓務省は、ブラジル以外の国への移住の可能性を調査し始めたのです。

その後、1934年には排日機運の高まりを受けてブラジル政府が「移民二分制限法」（定住した当該国人の2%を超えることができないとする制度）を発令したことにより、当時年間2万人の日本人入国の枠組みが、一挙に年間2500人まで制限されました。これにより急速にパラグアイへの海外移住の準備が始まり、翌1935年には日本人移民100家族のパラグアイへの入国許可を取得したのです。

パラグアイの移住地選定は拓務省の直轄で進められ、最終調査の末ラ・コルメナ地区が選定されました。

初期のラ・コルメナ移住地は、準備期間が短かったこともあり、その後たびたびバッタの大群の来襲にも大打撃を受け、退耕者が相次ぐなど、苦難の歴史を歩むことになりました。

1941年に太平洋戦争が始まると、パラグアイは日独伊枢軸国に対して国交断絶を宣言し、これにより日本政府の援助も後続移民が途絶えた上に、日本人移住者は敵性外国人として日本語学校・青年団の解体を強いられ、ラ・コルメナ移住地は前パラグアイの日本人収容地となりました。

戦後、敗戦によりアジア地域からの引き揚げ者・復員軍人など1000万人以上の余剰人口を抱えてその人口対策として政策的に海外移住を進める時代に入ります。1954年にはチャベス移住地への入植が始まりますが、1955年の4次移住家族の時には配耕地が不足する状態となり、新しく移住地が開設されました。

1961年8月には、日本パラグアイ移住協定に基づき、イグアス移住地が開設されました。イグアス移住地は首都アスンシオンからブラジルへ抜ける国際道路沿いということもあり、今までの移住地の経験を生かした移住地として作られ、1959年から1989年までの間に85000人の農夫を日本からパラグアイに移住することが許可されました。しかし、日本では高度経済成長期に入り、日本からの移住者は減少し、現在に至っています。その30年間にパラグアイに移住したのは7000人にすぎませんでした。

パラグアイの農業

・主要農作物（2003-2004）

作物	面積 (ha)	生産量 (t)	収量 (kg/ha)
[大豆]	1,870,000	3,583,685	1,916
トウモロコシ	440,000	1,120,000	2,545
小麦	325,000	715,000	2,200
綿花	320,000	330,000	1,031
[キャッサバ]	308,000	5,500,000	17,974
ポロト豆	73,500	65,195	887
サトウキビ	68,942	3,637,000	52,000
ゴマ	40,000	34,000	850
落花生	34,826	33,180	950

パラグアイ農業2

<日系移民の農業>

- ・入植地 間口300m 奥行1000m
1区画30ha
(イグアス)
- ・平均経営規模 240ha
- ・(パラグアイの平均経営規模 約33ha)
- ・大豆栽培
生産世界第6位 約380万t (2006)
輸出世界第4位 約222万t (2005)
- ・不耕起栽培 日系人が導入



戦前、試験的という厳しい条件の中、日本人移住者らがラ・コルメナにおいて数々の困難に立ち向かい、原生林を切りひらいた実績は、パラグアイにおいて勤勉な日本人という印象を与え、その後の日本人移住者に対する大きな信用を与えました。また、農業分野では貢献は大きく、ほとんどパラグアイでは摂取されていなかった野菜を栽培し、パラグアイ人の食生活の改善に大きく貢献しています。

現在のパラグアイにおける日本人移住者は約7,000人、人口から見ると0.14%の少数民族ではありますが、パラグアイの主要農産物の一つである大豆の全生産高の7%は日系農家で生産されており、今では同国の輸出総額の約40%を占め、世界でも第4位の輸出国となっています。特に日本人移住者によって取り入れられた「不耕栽培」は、非常に高い生産性を誇っています。

また、それまでは輸入に頼っていた小麦も、現在はその30%近くが日系農家によって生産され、国内の自給だけでなく、輸出により外貨獲得にも貢献しています。



テラローシャ



マテ茶



アオボイ

ワークシート

地理 2007/2008 ワークシート

[1]中南アメリカ(パラグアイ)について考える

1年 組 番 氏名 _____

Work 1 中南アメリカをラテンアメリカと表現しなくなってきた理由は？

[]

Work 2 中南アメリカ(ラテンアメリカ)と日本との関係について、身近で感じることは何か？

[]

Work 3 中南アメリカ(ラテンアメリカ)と日本の交流の歴史

(1868年 ハワイに集団移民、1898年ハワイ アメリカ合衆国に併合される)

1888年 (1) 奴隷制廃止による (2) 農園での労働力不足

1897年 メキシコへ 1899年 ペルーへ

1908年 笠戸丸で (1) へ

1934年 「移民二分制限法」発令

1936年 (3) へ

1957年 ボリビアへ

Work 4 パラグアイの最大の輸出品は何か？

[]

Work 5 下に示される中南アメリカ原産の作物で、パラグアイの人々の主食ともいえるものは何か？



()

Work 6 スライドで見た世界最大のダムは何か？

()

Work 7 Work 6のダムが建設されている川は何というか？

()

Work 8 パラグアイの人口構成中で一番多くを占めるのは？

()

Q 1 パラグアイについての印象は？

[]

Q 2 パラグアイをはじめとして日本人・日系人海外移住についてどのように感じたか？

[]

Q 3 日本の国際協力・援助のあり方について、どのように感じたか？

[]

◎本時の意見・感想

[]

< 自己評価 > 該当する記号に○をつけて下さい。

○資料・スライドの活用が円滑にできた。	A	B	C
○中南アメリカを多面的に捉えることができた。	A	B	C
○今日の自己総合評価	A	B	C